

## 今年のさくらんぼ販売を振り返って

今年のさくらんぼ販売がほぼ終了しました。本年は、特に早春からの天候不順によって青果物の生育が著しく影響を受けた年でもありました。青果物(さくらんぼ)は、生産量によってだけで価格が左右されるものでもありません。青果全体の生産量や消費の動向、気候の変動による食欲の増減、野菜と果物との消費のバランス、主要品目(キャベツ、だいこん、はくさい等)の価格の高騰や低迷等でも大きく影響を受けます。

そのような条件の中で、今年のさくらんぼの販売が繰り広げられました。4月9日には大きな期待を込めて、県選出国會議員の方々と東京事務所職員が、国会議事堂の衆参両院前庭に植栽されているさくらんぼの授粉作業を行いました。この段階では、山形県内の生育状況は例年より1週間くらい遅れているとのことでした。その後、山形では4月21日の花見ムード一色の時に、『まさかの大雪』があるなど、天候不順が続き、さくらんぼの生育にどう影響するのか心配されました。

例年であれば出荷のピークは6月20～25日頃ですが、今年は6月29日との情報に基づき、スーパー、量販店が、6月末の週末に照準を合わせて、チラシ等で一斉に販売促進をかけました。しかしながら入荷量が事前情報より少なく、需要に応えることができず、7月上旬に入荷がずれ込んできたため、再度販売促進を実施したところが多かったようです。幸いにも7月上旬から売場面積の多くを占める桃の入荷も遅れたため、それ以降の入荷にも対応していただけでしたが、後半にはうるみ等の品質に問題を残しました。最終的には計画していた出荷量には及ばず、次年度に課題を残す結果になった訳です。

本年は、たまたま春先の野菜の低迷がなく、高単価での青果物の取引の中で、さくらんぼの価格については、大きな影響もなく終了することが出来ましたが、本当にこれで良かったのか、取り組まなければならない課題が見えてきた年でもあります。

「さくらんぼ」は生産量、品質ともに山形が日本一と自他ともに認められています。市場を巡回してみると、長野県・山梨県・群馬県・秋田県・北海道と本県に次ぐ産地が品質向上に努力を積み上げてきているのが目立ってきています。特に群馬県の品質は立派なものでした。幸いに輸入さくらんぼが少なかったことが価格維持に繋がったと思われます。これは円安の影響や輸入さくらんぼの不作により、例年より多く輸入されなかったことが大きな要因でした。日本一を維持するためにも、今年反省点を関係者全員が共有し、来年に向けて、もう一度原点に帰って取り組むことが肝要ではないでしょうか。また、輸入さくらんぼが今後どのような展開を図ってくるのかについても十分に注目していく必要があります。

( 金澤 誠 筆 )